氏　　名	久礼　克季
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第３４６号
学位授与年月日	２０１３年９月３０日
学位授与の要件	学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	17 世紀ジャワ北岸地域の華人
審 査 委 員	（主査）弘末　雅士 上田　信 鈴木　恒之（東京女子大学名誉教授）

Ⅰ　論文内容の要旨

論文名　17 世紀ジャワ北岸地域の華人

(1)論文構成

第 1 章　はじめに
　1．問題の所在
　2．先行研究とその問題点
　3．本稿のねらい
　4．史料
第 2 章 17 世紀前半までのジャワ北岸地域の華人
　1．序
　2．17 世紀前半までのジャワ北岸地域への華人流入とその活動
　3．17 世紀前半におけるオランダ東インド会社(VOC)と華人
　4．マタラム王国の台頭と華人
　5．マタラムーVOC 関係と華人
第 3 章　17 世紀ジャワ北岸地域における貿易と華人
　1．序
　2．17 世紀ジャワ北岸地域の貿易状況
　3．米貿易
　4．砂糖貿易
　5．木材貿易
　6．ジャワ北岸地域への輸入
第 4 章　17 世紀後半における華人とマタラム王国
　1．序
　2．アマンクラット 1 世治世におけるマタラム王国の統治
　3．17 世紀中葉以降における華人流入
　4．鄭氏とジャワ北岸地域
　5．17 世紀後半におけるマタラムと華人
第 5 章　トルノジョヨ反乱と華人
　1．序
　2．反乱直前期における北岸地域社会と華人
　3．反乱の拡大と華人
　4．反乱の終息と華人
第 6 章　1680 年以降のジャワ北岸地域における華人の境遇の変容
　1．序
　2．第 3 期におけるジャワ北岸地域への華人流入
　3．首長と VOC の影響力拡大と華人
　4．華人貧困層と華人反乱
　5．華人反乱後のジャワ北岸地域と華人
第 7 章 おわりに
　1．本稿のまとめ
　2．17～18 世紀ジャワ北岸地域の華人の境遇における変化と共通性
注
史料集
表
図
地図
参考文献

（2）論文の内容要旨

第 1 章は、従来検討されていない 1630-1680 年のジャワ北岸地域での華人の活動を扱うことが、オランダ東インド会社やマタラム王国の経済活動を解明する上で重要な意義を有することを提示する。

第 2 章は、明朝の 1567 年の海禁政策を契機に華人が北岸地域に流入し、現地で貿易に従事したことを指摘する。そのうえで彼らが、同世紀初頭に内陸部から台頭しジャワ北岸地域を支配下に置いたマタラムと、同時期にバタヴィアに拠点を構えたオランダ東インド会社(以下 VOC とする)を、経済的に結びつけたことを明らかにする。

第 3 章は、ジャワ北岸地域の貿易が、17 世紀初頭まで主であった香辛料の中継から、同世紀中葉以降、米、木材、砂糖を VOC の拠点バタヴィアへ輸出する形態に変化したことを述べ、これらの生産や貿易に現地の華人が中心的な役割を担ったことを指摘する。

第 4 章は、まず 1661 年の清朝の遷界令にもかかわらず、マカオからジャワに華人流入し、鄭氏華人ともジャワ北岸が活発に貿易を行ったことを指摘する。そのうえで、マタラムが自ら推進する集権的政策のために、華人有力者に貿易の統轄や徴税、生活必需品の専売、現地通貨ピチの鋳造などの権利を与え、華人が現地経済を掌握したことを明らかにする。

第 5 章は、米の凶作や飢饉を契機に、1675 年から 1680 年まで中・東部ジャワで大規模に展開した反マタラムを掲げたトルノジョヨ反乱で、現地の経済を掌握していた華人が反乱軍の攻撃対象とされたことを明らかにする。また、VOC がマタラムを援助して反乱を鎮圧したことで、後者が前者に経済利権を提供する関係が成立したことを指摘する。

第 6 章では、1684 年清朝の海外渡航解禁により、1680 年以降の北岸地域に大規模な華人流入があったことを指摘する。マタラムや VOC さらに現地首長のもとで、華人は徴税や商品作物栽培を担い現地首長化する有力者が現れた一方で、新たに流入した華人の多くは有力者の下で労働者となった。こうした下層の華人とジャワ人貧困層が、1741 年に発生した華人反乱において VOC や現地有力者を攻撃した主要勢力であったことを示す。

結語にあたる第 7 章は、本論となった第 2 章から第 6 章までをまとめ、本論文が扱った時代のジャワ北岸地域における華人の活動と、先行研究がとりあげた 1680 年以降における彼らの活動とを比較し、その共通性と変化を示す。

以上の考察を通して本論文は、17 世紀ジャワ北岸地域における華人がマタラムと VOC を結びつけ、マタラムの貿易独占政策のもとで現地経済を掌握し、ジャワ社会と緊密な関係を形成したことを明らかにする。こうした活動を基盤に華人は、1680 年以降 VOC、マタラム、現地首長と協力関係を構築し、さらに華人反乱以後も VOC の経済活動の一翼を担ったことを指摘する。17 世紀ジャワ北岸地域における華人の活動が、権力者とジャワ人を経済的に仲介する役割を担い始めた意味において、VOC やオランダ植民地政庁による植民地体制の礎を形成したことを提示する。

Ⅱ　審査結果の要旨

東南アジア史における華人研究は、中国との交流のみならず、東南アジアの経済ならびに権力者と現地住民との関係を解明するためにも、重要な意義を有する。本論文は、17 世紀のジャワ北岸地域の華人の経済活動に注目し、彼らが介在してオランダ東インド会社とマタラム王国との関係構築がなされ、マタラム王国も華人を重用して徴税や生活日常品の専売にあたらせたことを明らかにする。これまで 1680 年以降のジャワ北岸地域の華人の活動について研究がなされているが、本研究はそれ以前に華人が活発に活動を展開したことを指摘し、彼らの現地社会への関わりにあらたな光を投げかける。

第 1 章で先行研究を整理し、本論文の目的を明示する。第 2 章は華人がジャワに定着する歴史的背景を説明したのち、17 世紀前半期において華人が、相互に敵対していたオランダ東インド会社とマタラム王国を経済的に結びつける役割を担ったことを提示する。従来研究がなされていなかった両者の関係構築を説得的に論じる。

第 3 章では、ジャワ北岸地域で米をはじめ砂糖や木材貿易を中心的に担ったことを明らかにする。とりわけ華人が始めたサトウキビ栽培と精糖は、17 世紀後半には 30 カ所前後の製糖所が設けられるに至り、労働者となったジャワ人と結びつきを強めたことを提示する。第 4 章は、台湾鄭氏がジャワ北岸に来航し、華人を介してマタラムから米を購入したことを明らかにする。こうしてジャワ社会において経済的影響力を強めた華人をマタラム王室も重用し、当時の王アマンクラット一世がジャワ人の海外渡航を厳重に禁止した一方で、華人に対外貿易を管轄させ、マタラム王権の集権化に彼らが貢献したことを提示し、マタラム王国の政治史研究に新たな光を投げかける。

第 5 章は、従来反マタラムの反乱として扱われてきた 1675 年～80 年に展開したトルノジョヨ反乱に参加したジャワ人民衆が、まず華人を襲撃した興味深い事実を明らかにする。またマタラム側の要請に応えてこの反乱の鎮圧に加担したオランダが、マタラムから経済的供与を引き出しつつ、反乱鎮圧後ふたたび華人を重用したことを議論する。第 6 章は、オランダ・マタラム・現地首長のもとで華人が影響力を拡大し、現地首長化して政治的にも台頭したことを提示する。また清朝が遷界令を撤廃し、華人の流入が増えるとともに彼らのなかで階層分化が生じ、これが 1740 年代の華人反乱に結びついたことを明らかにしつつ、華人反乱を 17 世紀からのパースペクティブで捉える重要性を提示する。

本論文は、植民地時代にオランダ人とジャワ人を経済的に仲介することになる華人について、その初期の時代における彼らのジャワ社会への参入を、難解な 17 世紀オランダ東インド会社の文書を用いながら解明する。また同時期の台湾鄭氏の活動についても、新たな光を投げかける。他地域での東インド会社や華人の活動との比較検討に課題を残すが、近世東南アジア史研究の新たな局面を切り開いた研究として、高く評価できるものである。